
とある崩壊の違法改変《バグチート》

藻部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある崩壊の違法改変^{バグチート}

【Nコード】

N6940Z

【作者名】

藻部

【あらすじ】

学園都市には、謎が多い。その殆どが都市伝説になっている。たとえば、魔術師の存在。たとえば、科学者の研究。その中にひとつに武装勢力に関するこんなものがある。無能力である彼らが、超能力を使うというもの。誰も信じないその噂は、真実のものだった。

注意事項

この物語はとある魔術の禁書目録の世界観をお借りしています。

しかし、原作を保てる自信がありません。

故に、原作を崩壊させかねない（てか崩壊させる）キャラが多数出てきます。加えて、原作キャラがキャラ崩壊して登場することもあります。

そのため、原作『とある科学の禁書目録』好きには、余りお勧めできません。

「大丈夫、俺力オスなの好きだから」みたいな人は酷評を感想に打ち込む準備をしてから読んでください。

「お前、逝く覚悟はあるか」な人は、即刻画面を戻ってくださいますように。

「一応読んでみるわ」みたいな人は読みづらいので覚悟してください。

一応（苦手な）シリアス調で行く予定です。

はじまり

「何ですの・・・これ」

ジャッジメント

風紀委員白井黒子は呆然としていた。

彼女はいつも通り放課後を過ごしていた。

その時、銀行強盗が現れたと言う報せを受けた。

その報せから約10分後。白井黒子が駆けつけたときには、

犯人や銀行員、見物者も含めて全ての人が倒れていた。

「いったい、何が」

「うう・・・」

そこで、白井黒子がまだ意識のある風紀委員を発見した。

「ちょっとあなた、大丈夫！一体何があったの？」

「そ、それが」

その次の言葉に、白井は驚愕した。

「能力を持つ武装勢力に、やられました」
スキルアウト

|| || || ||

学園都市には、謎が多い。

その殆どが都市伝説になっている。

たとえば、魔術師の存在。

たとえば、科学者の研究。

たとえば、謎のレベル5。まあこれは嘘だろうが。

そんな噂のひとつに武装勢力に関するこんなものがある。無能力者である彼らが、超能力を使うというもの。

それはレベルの低い超能力者なんじゃないかと言う声があった。

しかし、その能力者達はレベル3以上の能力を扱えると言うのだ。

だから誰も信じなかった。

しかし、誰も信じないその噂こそ、真実のものだった。

はじまり（後書き）

みたいな。

ところで、スキルアウトの漢字（武装勢力）合ってるのかな？

日常

俺は超能力者が嫌いだ。

俺は科学者が嫌いだ。

俺は人間が嫌いだ。

俺は俺が嫌いだ。

〓 〓 〓 〓

いつも通りの日常。

ただ町をぶらつくこと。

仕事が無いときはそうしている。

「・・・」

ただ今日は少し違った。

いや、かなりになるか。

銀行強盗の現場に立ち会ったのだ。

「おら、さっさとしろ！」

店の中から叫ぶ声が聞こえる。十中八九、強盗のものだ。
店の前には大型のトラックが停車している。

周りを見るが、まだ風紀委員あいつらは来てないらしい。

「・・・はあ」

こんなときに限って俺はここにいる。
こんなときに限って、な。

|| || || ||

「ちっ、手間取らせやがって」

強盗が店の中から出てきた。
数は四人。

トラックに金を詰め込む強盗たち。
そして全て詰め終わった後、一人が運転席にやって来た。

「へへ、今回も余裕だったな」

そして、エンジンをかけたとき、
トラックが爆発した。

「・・・」

「ジャッジメントで・・・す・・・」

やって来た風紀委員が絶句している。

当たり前だろう。なぜならば、

その場にいた全ての人間が倒れているのだから。

「何、これ」

「見れば分かれよ」

「!？」

突然の声に振り向く風紀委員。

しかし、そこには四人の大人が倒れているだけだった。

「そいつらが銀行強盗犯だ。よろしく頼むぞ」

「ま、待ちなさい！」

風紀委員が何も無い空間に叫ぶ。

「あなたは、いったい」

「聞くか？普通」

見えない声が言う。

「学園都市にいる人間が。強盗、銀行員、見物者、子供大人関係なく気絶してるんだぞ。決まってるだろ」

そして、声は言った。

「学園都市の敵。スキルアウトその一人だ」

そこで、風紀委員は気絶した。

通常

俺が超能力者を倒す理由。

俺が魔術師を倒す理由。

そんなものは決まっている。

誰だってそうだろう？

〓 〓 〓

「ふん」

俺が今いるのは学園都市の外れにある小さな研究所だ。

本当はもう機能してないはずなのだが、ある人間が自分の住み家として改造し、今はこの学園都市に干渉されない唯一の場所として、『裏』の人間によく知られている。

どんな技術を使用しているかは知らないがな。

「入るぞ」

研究所にしては薄いドアを押して開けると、

「やあやあ来たね、私の手足よ。」

珍しく入り口の椅子に座っていたこの場所の研究員がいた。
と言うかこいつがこの研究所を改造した人間だ。

「早かった、と言うよりは、遅かったかな、今日は。」

「少し面倒ごとに巻き込まれてな」

いつもどおりの問答をする。

こいつは謎の人間。今分かってる限りは『スキルアウト敵の味方』ということ
だけだ。

名前（仮）兎飴^{とめ} 流栖^{じゅうす}と名乗っている。知り合いが調べたら、全
て読みを一文字にすると、『ウイルス』になるらしい。
始めて会った時から何も分かってはいないが、ただ一つ分かった
のはこいつの生き方。

「ん？もしかしてまたあれを聞きたいか？」

「断っても無駄だろ」

「それでも無いんだがな。まあ構わん。」

そして座っていた椅子の上に立ち、語りだした。

「魔術は私を守るためにある。

科学は私を助けるためにある。

そして超能力は、私を楽しませるためにある。

これが私にとっての、この世界の在り方だ。」

その台詞の後、椅子に座り直し、自慢げにこちらに向かって言う。

「どうだ。いい考えだろ。」

「…まあな」

いつも聞いているから、俺は何とも言えないのだが、一応肯定しておいた。

そんなことより、本題である。

「お前が俺を呼ぶ。それは何か仕事があるからだろ。今回は一体何のようだ？」

「ああ、そうだね。今すっかり忘れてたよ。」

そして、仕事の内容を説明する。

「今回は楽な仕事。実に楽な、ね。ここところ科学者の中に、我が学園都市の技術を売っている愚かしい奴がいる。今日はそいつを、

軽く殺してほしい。やり方は任す。」

・・・。

「久しぶりの殺人以来だな」

「うん。そうなんだ。すまないが頼まれてくれるな。」

「拒否権は、いない」

俺は後ろを振り返り、ドアを引く。

「それじゃ、少し敵^{つみ}をしてくる」

現実

その夜。

仕事は何事も無く終了させた。

その帰り。

何もないと思っただのが間違いか。

|| || ||

「ジャツジメントですよ！」

「・・・」

特徴的な喋り方をする風紀委員が現れた。

今の現れ方から考えて、能力は空間移動か。
レポート

「ちっ」

面倒なタイミングで会ったな。

さっきの仕事で、あれ（透明化）を使うことはできないからな。

「あなた、あの銀行強盗が現れた時、近くにいましたよね？」

「…そうだが」

「あの近くにいた人は全て気絶していました。犯人グループにいたっては軽い全身火傷を負っています」

全身の時点で軽くない気がするが。

「しかし、あなたはあの場にいなかった。それだけではなく、あなたはあの研究所に行ったと言う話を聞きました」

「…だったら」

「話を聞かせてもらいますわ」

「だよな」

どうするか。このまま捕まるのは面倒だし、実力じゃ逃げ切れないし。

残ってる手段を、使っしかなさそうだな。

俺はズボンのポケットに手を入れて、あるものを掴む。

「抵抗は無駄ですわよ」

風紀委員が身構える。
当たり前だな。

意味は無いのに。

「お前に一つ聞きたい」

「何ですか？」

「この辺りに俺たち以外の人間はいるか」

「いませんわ」

「そうか。それは残念だ」

そこで、俺から音が発生する。

「!？」

「キャパディシダウン。対超能力者用の兵器だ。小型だからあんまり長い間流せないがな」

「なぜ、あなたは聞かないのですか？」

「は？」

風紀委員は、頭を抱えながら俺に問いかけてきた。

「あなたも、能力者なのでしょう？」

「・・・またか」

「？」

「いや気にするな、こっちの話」

今回で何回目だ、間違えられたのは。
しかし、やはり侵害だ。

「お前たち、俺が何に見える」

「は？」

「俺が学園都市で何をしてると思う。ヒントはあの風紀委員に言った台詞」

「スキルアウト、ですか？」

「そうだ」

そして、先ほどの問いに答える。

「武装集団は無能力者の集まり。超能力がいるわけないだろ」

「!？」

「あのな、普通だろうがそれぐらい」

「で、でも、あなたはあの場で消えて」

「その仕掛けはこれだ」

そして、服を捲くる。

そこに在ったのは、機械だった。

「ステルススーツ透明服その名のとおり、姿を消せる服だ」

「そんな！その服は！」

「事実、この学園都市でさえ未だに完成させてないと言う。が、それは嘘だ。こんなものづくに完成している。ただ表に出さないだけだな」

そして、それを盗んだのが俺なんだが、いちいち説明してると時間切れになるからな。

俺は逆のポケットからライトを取り出して相手に向ける。

「まあなんだ。疲れただろ、お前も」

「?、あなた何を言っているんですの」

「…そうだな、とりあえず、・・・寝てろよ」

ライトの電源を入れる。その後すぐに切る。
その直後に、風紀委員が気絶する。

光を利用して作った兵器。視覚から人間の脳に影響を与える代物だ。

効力は、気絶と記憶障害。数十分の記憶を消す。副作用として目覚めはすごく悪い。

ピーッ！

と、ここで時間切れ。丁度のタイミングだな。

「おい！誰かいるのか！」

さらにいいタイミングで人間が来た。

「ここにいるぞ！」

俺は叫んだ後に声のする方とは逆方向に歩く。
面倒ごとが嫌いだからな。
そのまま俺は、その場を去った。

|| ||

|| ||

|| ||

そろそろ名乗るか。俺の名を。

俺は大和^{やまと}仙雅^{せんが}と言う奇妙な名前をしている。

元は学園都市とは関係ない所で普通に暮らしていたのだが、周りの人間に勧められたので入った。

結果は無能力《レベル0》。普通だな。何も無い。

俺はそのまま何事も無く暮らす予定だった。

ただ、俺の前に現れた。

この現実には、勝てなかった。

「始めまして、クズ人間。君を私は雇いたい。私の手足として。」

この魔術師にだけは。

過去

「レベル0。無能力ですね」

この学園都市で初めて聞いた言葉だ。

その途端、俺は何か、こう、

…駄目だ。あのときの気持ちは未だに言葉にできない。

ただ言えたのは、何かを失った。そんな気がする。

何も失ってはいない、はずなんだがな。

その後は、どうしたかな？

とりあえず、この都市を歩いてた。

こっちで買ったマンションに行くのも良かったが、目的無く歩いて、都市に慣れておきたかった。

そして、路地裏を歩いているときに、突然上から人が降ってきた。

「な、なんだ？」

「あぶないなあ、もう」

落ちてきた奴は白衣姿だったので、一目で科学者だと判断した。
ただ異常だったのは、その髪の色だ。

絵の具の色をこちゃ混ぜにしたような、そんな色。一番近い色を

挙げるなら迷彩色か？

だからなのか何か違和感があった。

その違和感の正体を、この時はまだ分からなかった。

「えっと、大丈夫かお前？」

「うん？うん。うん！」

ただ、今分かってるのは、

「起きれるか？」

「うんにゃ。だから起こして〜」

「拒否、しなくていいか」

そして、手を取った。

このとき、拒否した方が幸せだったこと。

それだけは分かった。

〓 〓 〓

今いるのは、そこら辺で見つけたカフェの中だ。
落ち着きたかったのが理由。

それでなぜ落ちてきたのか、いろいろと理由を聞いた。

「えっと、とりあえず聞いたことを繰り返すぞ」

「はいはいはいはいな。」

「お前は科学者なんだな」

「ワイエス！」

「でもって、今追われてると」

「ういうい。」

「その理由が、…すまん。聞き逃したな。もう一度言ってくれ」

「えーッとね。」

俺はイラつくだけだが、多分可愛い仕草をしてから答えてくれた。

「スキルアウトに協力してるの」

「帰る」

服を掴まれる。

いや、普通だろ。当たり前だろ。常識だろ。

なんで、この都市で一番危険とされてる武装集団なんか協力してんだよ。

一部ではあるが、あいつらは超能力者を襲う危険な連中だろ。絶対関わりたくないじゃん。

「m_△あ m_△あ そう言わずに。」

「言うだろ」

てか、何でそんな奴に関わったんだろ、俺。絶対に不運じゃねえか。

学園都市一日目で面倒ごとに巻き込まれるなんて。

「ん？そついえばよ」

「UIUI?」

「お前、一体何から逃げてたんだ」

「ああ、それ。えつとね」

掴んでいた手を離して椅子に座りなおす女。

その後、まだ半分残っているコーヒーを飲んでから、

「君暗部って知ってる？」

「帰る」

「二度目！」

また服を捕まれる。

はあ？何だよ暗部って。何かの映画かよ。
ふざけんな。

「あのさ、よく考えようよ。ここは学園都市、完全独立教育研究機関だよ？普通に考えれば分かるでしょ。秘密を漏らさないために隠蔽する集団がいるわ・け・よ。」

「ふうん、そう。よく知らんけどそれ、こんなところで言っているのか？」

「モチOUT。」

だよな。とりあえず、今の話を聞いたのは俺だけかなら安心だ。問題は何も無い。

「よし、俺はこの都市を逃げ出す。お前はがんばって生き延びろ」

「三度目のキャつつつチ！」

さっきまで服を掴んでたので、間のテーブルを飛び越えて首に掴まってきた。

「そう冷たいこと言うなよ。私達は既に運命共同体だろう？」

「主にお前が勝手にいろいろ喋ったからだかな」

ため息が出た。そりゃそうだろ。

学園都市に来たのは今日。そして命が危険になったのも今日。

このふざけた女に付き合ったせいでこんな目に遭うなんて思ってた。なかった。

最悪だ。

「なにかお困りですか？」

店員が駆けつけてきた。さっきこいつが飛びついてきたときにグラスが落ちたから、きつとその音に反応したんだろう。

「いや、大丈夫だ」

「そうそうだいじょぶ。」

「そうですか。では」

そのとき、寒気がした。気になって振り向こうとした、その時。

パリン！と、

窓ガラスが割れる音がした。

同時に、近くにいたウェイターが倒れた。

「！」

「！？」

『何だ？何事だ？』

周りの客が異変に気がついて近づいてくる。

「逃げるぞ！」

「オーケー！」

他人を巻き込むわけにはいかない。

とりあえず、人気の無い裏路地とかに逃げるか。

〓 〓 〓 〓

過去の続き

|| || || ||

「ねえ！一つ聞いて！」

「なんだ！」

「ここ右じゃないよ。」

「左な」

ただいま俺達は研究施設の集まってる場所を走っている。

何でも、この女がいい場所を知っているらしいので、そこを目指している。

ちなみに、このだるい道案内はもし相手が聞いても困惑するようにと女が考えたことだ。

結果は俺が聞き取り難くなったただけだが。

「それより、今目指してる場所なら安全なんだよな！」

「たぶんね。」

「ここに来て他人事かよ！」

「わはは。それよりここ右。それで到着。」

言われるままに曲がったその先は、
行き止まりだった。

抜け道の無い正真正銘の行き止まり。

「終わった・・・」

俺は崩れ落ちた。

「うん。おわたおわた。」

軽く笑いながら言う女。

最悪だ。不運過ぎる。こいつの言う通りにしたら死ぬことになる
とは。

必死に逃げた俺が、馬鹿みたいだった。

「もう逃げ場は無い」

後ろから声がする。

見てみれば、追っ手が五人ほど退路を塞いでいた。

「おとなしくしろ」

「・・・わかった」

「ういうい。」

俺が諦めて返事をする。

相手の手には今まで実際に見たことの無い、本物の銃が握られていた。

俺の人生はこれで終わるのか。

「こんなときは、神様に何か願うべきか？」

「そんなわけ無いでしょ。」

そのとき、隣にいた女が壁に向かって歩き始めた。

「それに、この世に神様なんて、もういないよ？」

「お前、何やってんだよ……」

死にたいのかあいつは。自分の命が危険なことも分からない馬鹿なのか？

「今すぐ戻れ！殺されるぞ！」

「あつはは。大丈夫だよ。」

女が壁の前に来た辺りでこちらを振り向いた。
そして、笑顔でこういった。

「死ぬのはあっちだから」

瞬間。

追っ手から叫び声が聞こえた。
見れば、炎が追っ手達を包み込んでいた。

「なんだ…。一体、何があった」

「秘密はこれ」

女の方を向くと、なにやらおかしい模様が壁に書いてあった。
まるで、ゲームなんかに出てくる魔法陣のようなものが。

「魔法、まさか…。」

「そう、その通り。」

女が言った。

「私は本当の魔術師なんだよ。」

「そんな、馬鹿な」

魔術なんて、それこそ超能力なんかより非現実的なものだろ。
そんな奴が、何でここにいる。

「それはね、老後を楽しに暮らすためさ。」

「……は？」

「いや、私はこう見えて結構年寄りでね。なんともう20歳なんだよ。」

「十分若いだろ」

てか待てよ。こいつ、それだけの理由でここに乗り込んだのか。

「うん。君の思う通り私は物好きだ。」

「そんなことは思っていないけどな…」

「それで、おもしろいもの超能力者が多くいるこの都市に入り込んだわけだ。」

「……」

「ただ、困ったこともある。それは私の手伝いがまだ三人しかいないことだ。」

・・・。

「私の魔法は、使うためにいろいろ準備とか必要だし、何より戦闘要員が誰もいない！」

「えっと」

「そこで見つけたのが君だクズ人間」

「はあ!?!」

いきなり指差されたと思ったらクズ人間って。

「お前、ふざけるなよ」

「うん?」

ゆっくりと立ち上がる俺。

目の前の魔術師に向かって睨みつける。

「何で俺がお前の手伝いをしないといけない！俺は無能力者で！ただの人で！お前ら異常な奴じゃないんだよ！」

「・・・いいじゃん別に。」

「良くねえよ！」

怒鳴りつける。

「だいたい、なんだよそのクズ人間って。俺から見れば、お前みたいに人殺す奴の方がクズだよ」

「・・・そう、だかね。そうかもね。うん、よく分かる。ごめん。言葉、間違えたね。」

「ああ？」

「今の君はつまらないから、だから私はクズ人間って呼んだんだよ。」

なんだそれ？つまらないのは普通の人間皆一緒だろ。

「君は今つまらない。だから、面白くしようと思ったんだ。」

「お前、今何語喋ってた？」

「君はさ、超能力者が嫌いでしょ？」

「!？」

本当に何を言ってるんだこいつは？訳が分からない。

「何で今の話からそんな結論が出てくるんだよ！」

「態度の変化。」

「はぁ！」

「君さ、私が魔術師だって分かってからずっと睨んでるよ。」

「そんなの当たり前だろ！現実にそんな、科学とは正反対の」

「異常な人がいるから？」

「だよ！そつだよ！」

「でつしょ。あなたはそんな異常が」

「羨ましいんだよ！」

「・・・つい？」

そつだ。俺は羨ましいんだ。

超能力とか言う特別な力を持つ奴が。
魔術なんて異常な技を使う奴が。
羨ましいだけで、

「別に、嫌いじゃねえよ…」

「・・・はあ。」

「だが、クズ人間か」

確かに異常な奴らから見ればそうかもな。
特にこんな、老後のために危険なことをする奴から見ればな。

「俺は普通か」

「いや、私はそこをクズだって言ったの」

「だから、この普通…」

「君十分異常だよ?」

「はい?」

過去から今に

「だってだって、今まで逃げてきて息切れ一切してないじゃん。体力があるのなら別にいいけど、それでも今までずっと撃つてた銃弾に一発も当たらないなんて幸運じゃん。神じゃん。しわけ者じゃん。それでも自分を、不運で惨めで以下普通みたいな一般人に仕立てるの？」

「……」

そういえば、弾に一発も当たらなかったな。

「君も、超能力ほどじゃないけど異常なんだよ。だから……」

そして息を大きく吸い込む。

「ゲホ、ゲホ、ゲホ、ここ煙スゴホ！」

「……」

締まらないな。

「とりあえず、水で消そう。ケホ！」

女が壁に手を当てる。

すると、上から水が大量に降ってきた。

おかげで火が消えて、ついでに俺達もずぶ濡れになった。

「・・・」

「。。。。ツクシュン！」

「どうすんだこれ」

「えつとえと、とりあえず内の研究所に行こう」

そして再び壁に手をやると、後ろの壁に穴が開いた。
そのすぐ後ろには、小さな研究所があった。

|| || || ||

「着替え完了！」

十分後。その間俺は外で待たされた。

「それじゃ、初めて会ったという事で」

そして、今度こそこちらに向かって宣言した。

「始めまして、クズ人間。君を私は雇いたい。私の手足として。」

「・・・いまさらだけどな」

「だよね。で、答えは？」

「・・・」

ちなみにこいつが着替えてる間に、こいつの手伝いの一人が俺に
ネタバレをしていた。

|| || ||

「あなたは事実、あの方に助けられたのです」

「と、言うと」

「あなたも薄々思っていたでしょうが、本当はあなたに向けて銃弾
は一つも飛んでいません。それどころかあなたは、銃の先にいたこ
となんて一度もありません」

すると、ある写真を渡された。

そこには、追っ手と戦う謎の物体が写っていた。

「それはギーちゃんと言って、彼女の戦闘用魔法『スモールサモン小型召喚』によって召喚された小さなゴーレムです。原理は分かりませんが、彼女は小さなレプリカを無陣無詠唱で召喚できるらしいです。」

「つまり」

「そう、あなたは何でもないただの人。そのことに変わりありません。」

「…そうか」

「ですが」

「？」

少しためてから言う。

「あの方はあなたが好きみたいなんです」

「!？」

「ですから、手伝ってあげてください」

〓 〓 〓

てなわけで、俺は普通で、こいつが異常で、

だから俺は何もできないただの人で、

こいつに協力しても異常にはならないわけだ。

だから、

「どうせすることも無いし、暇つぶしで手伝ってやるよ」

手伝ってやろう。そうすれば最低、クズ人間呼ばわりされることはないだろうから。

「おう、ありがとさんね。」

「そのかわり、条件として俺にも魔術を教える」

「そう簡単にできるか！魔術は教えてあげられないよ。でも、たしかに無能力じゃきついか。超能力は勝手に身に付くものだから無理だし、あっそうだ。だったらさ、私が作った化学兵器使ってよ。」

「化学兵器？」

「とりあえず今あるのは光学迷彩スーツ（盗んだ）でしょ。後サプレッサー付きの拳銃（さっきの追っ手が使ってた）でしょ。それから小型充電式キャパディシタウン発生プレイヤー（スキルアウト

「が落とした奴」でしょ。」

「お前作ってないじゃん」

「では最初の指令！」

「無視かよ」

「邪魔な研究員全員ぶっ殺してこい！」

「いきなり殺人かよ！」

「あ、大丈夫。殺すつてのは比喻で、実際は『研究資料全て盗んで来い』って意味だから。」

「それがなぜ『殺す』になる」

「研究者にとって研究材料が全て消される。それすなわち『氏』を意味する。」

「あっそう」

とりあえず、これで俺はこの集団に入ったわけだ。

ちなみに、もし拒否していた場合はない。

なぜなら拒否すれば、俺は暗部に殺されていたこと間違いなしだからだ。

さらに加えるなら、この集団に入ったおかげで、現都市伝説、

ハンドレッグ
超能力使用無能力者』の二つ名みたいなのが俺に付いたわけだ。そ
こだけ考えれば、俺は良い選択ができたと言えるかもしれない。・
・いや、言えないな。

仕事始め

仕事があると言う呼び出しを受けた。

仕事は不定期なので、たまにとんでもない時にかかってくる。

今日は久々の学校にいるときにかかってきた。

迷惑だな。

〃 〃 〃 〃

「で、その呼び出した本人はどこだ」

「あの方はただいま交渉中になります」

ここはあの研究所の中だ。

外見と違い中は綺麗なんだが、その分本当に研究所なのか怪しくなってくる。

開発してる場所は地下にあるらしい。

「地下、見た事はないが在るのか？」

「もちろんです、そうでなければまず研究・開発ができません」

「そうかい」

今喋ってるのはあの日俺にネタバレした女。

名前は時暈ときかさ 夜音よるね。

俺より先にあいつの手伝いをする超能力者だ。

理由は詳しく聞いてないが、聞く限りじゃ兎飴に助けられたよう
だ。

能力のことは解らない。

「この能力がなければよかったですけどね」

「俺はその能力の内容が分からんからコメントしにくいな。ところで、他の奴はどうした？」

「アサはあの方と一緒にです。ヒルは掃除の最中です」

「掃除？こんなに綺麗なのにか？」

「いえ、地下の方であの方が誤ってアンモニアを流してしまい、ただいまそれを撤去しているとこです」

「この臭いはそれか」

そんな話をしていると突然ドアを蹴り破って人が入ってきた。

「しーーーーぬーーーー！」

「最後何故音程下げた」

「おう、主汝しゅなんじか」

こいつは時暈ひるみ 昼美。

主に雑用を任せられている兎飴の手伝い。こいつも能力者だ。

こいつの能力は知っている。名前は『障害消失オールクリア』レベルは4。

透視能力の変化型で、一つの対象に限定されるが、その対象がどこに居ようと、それこそ、地球の裏側に居ようと見ることができる。ただし、能力名の通り、その能力は対象以外の全ての障害物を視界に入らなくするだけなので、対象が遠ければ、望遠鏡などの道具が必要になる。

また、足元なども見えなくなるため、精神や脳の負担はかなりのモノになる。そのため、長時間使うことはできない。

「パンダ！」

「・・・」

まあ、そんな能力を持つこいつだが、かなり馬鹿だ。

言語もおかしく、一人称は『自己じおのれ』。二人称は『主汝』と言う。

馬鹿な奴を動物で例えることがあるが、生憎こいつは生物より馬鹿なのでそういったこともできない。

だからだと良いが、こいつは自分の能力を最大十分扱うことができる。

兎飴いわく、常人では無理らしい。

「うん？どうした主汝、何故黙る」

「お前から酷い臭いがするから」

「ひどい好きでこんな臭いじゃないのに！」

「分かったからお風呂に入ってくださいなさいヒル。あなた今喋りたくないぐらい臭うわよ」

「グガ、ヤネまでそんな事言うなんて」

膝を突く昼美。

「モウヨメイケナ」

「早く行きなさい。嫌いになるわよ」

「うわ~~~~ん馬鹿共がああ！！」

と叫びながら昼美はドアから出て行った。
騒がしい奴だな。

「おひ、いつはいなみかあつのは？」

「あら、もう話は終わったのですか？」

昼光と入れ替わる形で兎飴と朝香が入ってきた。

兎飴の最後の手伝いは時暈 あさか 朝香。

兎飴以外で俺が知る魔術師の一人だ。

扱う魔法は『スタンダードマジック基本術式』俺が兎飴に連れてこられた時に、壁の術

式を発動したが、あれはこの朝香の使う魔術だ。

術式を書いた後、その陣に触れることで発動するらしい。

タイプは火、水、電気、風、温度の五つ。

温度以外はその付近に発動させることができ、温度のみ、その陣の上の温度を変えることができる。

「夏冬エアコンいらす」

「「「!?!」」」

ほぼ無口だが、突然要点のみ話すことがあるので要注意。

ちなみに、趣味は占い、手品、オカルト。

お前らが既にオカルトだろ。とか言うとか付けにされる（この研究所内のみ）。

「それより、たまに思うがなんで『手伝い』って呼び方をするんだ」

「うん？ほれはへ」

「鼻つまみながら喋るな」

「それはね、君と違って非戦闘員だからだよ」

「そうか」

「そんなことより」

近くの椅子に座った後こちらを向いてから言った。

「仕事だよん」

「お前、最初とキャラズいぶん違うよな」

「最初じゃない。当初の予定とだ」

依頼内容

「・・・はあ」

なんていうか。

凄く嫌だな。この仕事。

|| || || ||

「今回の仕事はいつもより簡単。スキルアウトの撃破。」

「・・・は？」

「これ」

朝香が紙を渡してきた。

どうやら交渉の時に書いていたメモのようだ。

「君もスキルアウトについては知ってるでしょ？」

「まあ、名乗ってるわけだし」

「今回は、その一つを潰してほしいの。」

「待て」

手を前に出して止める。

「ちょっと待てよ、何でそんなことしないといけない」

出していた手を頭に持っていく。

「俺は一人だし、正確には違うけど、スキルアウトなんだぜ。どうしてそんなことしないといけないんだ」

「うん」

腕を組む兎飴。

「私達は学園都市の敵。だけど、この都市を利用するだけ利用しないといけないんだ。だって、私はまだ全部の機械を作れるわけじゃないからね。だからここで、都市の危険分子倒さないと。」

少し声を落として喋る兎飴。

「そんなの、お前の言う暗部とか、アンチスキルとかがなんとかするだろ。なんで」

「簡単に言つと、あいつらの『計画』とだね。近いうちにあるらしいんだけどさ。」

と言つて、兎飴が俺の持つメモを指差す。

「それに書いてるでしょ。」

「・・・」

メモを見る。

依頼主は、いつも通り無いか。

集団名はいいとして、この次の内容が。

『学園都市で手に入る物』

『トカゲのしっぽ』

『ヤモリの黒焼…』

シュン…

風が切れる音がした。

同時に紙が入れ替わっていた。

「・・・」

朝香は無言で、体制もそのままだった。

「・・・」

気を取り直してもう一度。

『学園都市の障害要素』

『1、高度の科学兵器』

・・・うん？これ以上書いてない？

「それだけで十分でしょ・・・」

「はい？」

「つまりは、化学兵器壊すって事だろうがあああ！」

兎飴が叫んだ後にいきなり暴走し始めた。

〓
〓
〓
〓

その後は、夜音が朝香から仕事を聞いてその場所にやってきた。
仕事場とはつまり、相手の本拠地である。

研究所は暴走している兎飴を止めていると思う。

それより、どうして研究所だと、こう、緊張感が無いんだ。

シリアスって奴か。

多分あの女が原因か。困ったもんだ。

「まあ、仕事の時は通信でもしない限り、邪魔されないから大丈夫か」

それじゃ、確認から始めますか。

内容：武装集団スキルアウトの殲滅

初だな。当たり前だが。

手持ち武装

1、拳銃（名前不明 リボルバーではない 何なんだろう、これ）
弾数×10 サプレッサー付き

あの日追っ手が持っていた奴だ。これはそれを兎飴が改良した奴。
今日が初だったりする。

2、ステルススーツMark？（試作型3号）

透明服の改造品がMk？。で、それを改造してるのがMk？。

普通か。

具体的に？は性能が全体的に上がり、？・3号は時間がかなり延長されている。

その分、能力者に見つかりやすくなっている。

3から先は、少し言わないでおう。
俺もよく知らない物があるし、何より楽しみが無くなる。

「それじゃ、行きますか」

仕事、開始

潜入

敵の本拠地は今に使われていない研究所だった。
でも、よくこんな所を選んだな。
普通は気付かれる、いや、もう気付かれてるのか。

|| || || ||

「潜入は難なく、か」

表には見張りは、いなかった。
まあそれは、もう使われていない研究所に誰かいれば、普通の人間でも怪しむものだ。

俺はステルススーツ用のヘルメットをつつく。
すると、暗視用の画面が変わる。
こんな改造はあいつ得意なだけだな。
武器は今回が初らしい。
安全の保障は無いらしいし、使用は控えるか。

「で、外にいる敵は…」

ひい、ふう、みい・・・ざっと10人か。
無理だな。絶対。

相手取ったら確実に死ぬ。

「ここは、リーダー格潰した方が楽か」

それじゃ、行動するか。

俺が光学迷彩のスイッチを押そうとした。
その時、通信が入った。

・・・はあ。

俺はヘルメットのボタンを押す。

『もしかしたら聞こえる？』

「・・・おう」

電話の声は昼美だった。

こいつと話すのだからいいんだよな。

「それで、なんか用か」

『うん』

返事の後、軽く息を吸う音が聞こえた。

その後少しの沈黙があり、

『先にしてほしいことがあるの』

と言った。

呼吸が乱れている。

どうやら、少し能力を使っていたらしい。

ちなみに、ここは研究所と大分離れているのを、説明しておこう。
あいつの能力は、遠近問わず使用時の疲労はかなりのものになる。
早めに話を終わらせて、こいつを休ませよう。

「で、してほしいことって何だ？」

『うん、その中にね、とんでもないものが、あるの』

「とんでもない？」

何だそれは。ただのスキルアウトが持てる物といえど、キャパシ
ティダウンとか、その辺だよな。あれは俺には意味無いものだし、
別に無視しても…

『パワードスーツ
駆動鎧^ツって知ってる？』

「・・・何？」

『パスワードスーツ。警備員がたまに使ってる大型ロボットのこと』

微妙に違う気がするが、それは別にいいとして、

「なんであいつらそんなもの持ってるんだよ」

あれって、結構すごいものだよな。

「まさか、盗み出されたのか？」

『いや、偽者だよ。でも、かなり色々詰め込んでるみたいだから、それを持ち帰ってほしいの』

「・・・」

偽者でも作れるのはすごいよな。それ。

しかも、その偽者を盗み出せって言ってるぞこいつ。

確か俺は、ここの連中を潰すために来たはずなんだが。

『ほら、それはその連中が、恐ろしい作戦を近いうちにするからじゃん。そのパスワードスーツを持ち帰れば、何にもできないスキルアウトを、アンチスキルが、なんとか、ね』

ハアハアと、さらに息遣いが荒くなる昼美。
もしかして、今も能力を使っているのか？
馬鹿な奴だ。

「分かったよ。とりあえず、その偽駆動鎧、ガラクタを持ち帰れば
いいんだな」

『ほいほい。あ、それから、遠距離じゃない兵器。あれが役に立
つと思うから、使ってみてね。それじゃ』

そこで通信が切れた。

「ああ〜だるい」

でかさは不明だが、パワードスーツってだけあって、重いんだろ
うな。

持ち帰る方法は後で考えるとして、今はこいつらを…

「って、あ」

そこで、ある考えに辿り着く。
重いものは持ち上げれない。方法はいくつかあるが、全て地上ル
ートになる。

それはつまり・・・

「敵全滅かよ……」

……あ~~~~~

面倒だ。

でも他に持ち帰る方法はないし、あっても敵に狙い撃ちされるだろうし、

仕方がない。当初の目的の後で、しっかり持ち帰るか。

「じゃ、行くか」

そして、光学迷彩のスイッチを押した。

潜入（後書き）

タイトル考えるのが面倒になってきた…
今後変なタイトルが在ってもスルーしてください（泣

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6940z/>

とある崩壊の違法改変《バグチート》

2012年1月9日21時55分発行